

## 埼玉親善大使レポート

令和7年度埼玉県・クイーンズランド州スカラシップ〈大学附属 英語学校派遣〉

小島 公人 (Kojima Kimito)

### 1. はじめに

今回、埼玉親善大使として、2/14(土)から 3/23(月)までの約 5 週間、オーストラリア・クイーンズランド州にあるサザンクロス大学附属語学学校に通い、英語を学ぶ機会をいただいた。本レポートでは、現地での生活や学習環境、オーストラリアで感じた文化・価値観の違い、そして埼玉親善大使として行った埼玉県の PR 活動について報告する。

### 2. 現地での生活と学習環境

【ホームステイ先】父、母、息子（中学生）3 人家族であった。家には祖母やホストマザーの友人が訪れることも多く、週末には人が集まってパーティーをするなど、家族や友人との時間を大切にする雰囲気を感じた。その中で、ホストマザーの友人の子どもたちに野球を教えたり、日本文化を紹介したりする機会もあり、自分らしい形で交流することができた。また、夜にはホストファミリーとトランプを楽しんだ。



日本では聞いたことのない Rummy

というトランプゲームをした



子供たちに日本の伝統的な遊び

紙風船や吹き戻しを教えた

【学校】 8:30am から 1:15pm まで授業を受けた。授業は午前中 90 分授業が 2 コマ、午後 60 分授業が 1 コマで、文法、長文読解、リスニング、語彙をバランスよく学ぶ内容であった。特に、オーストラリア特有の表現や現地の発音に触れられたことは、日本で英語を学ぶだけでは得にくい経験であった。

語学学校には、台湾、韓国、中国などのアジア圏に加え、チリやアルゼンチンなど南米出身の学生も在籍していた。一方で、学校全体として 9 割以上日本人学生のため、英語を使う機会が自然に増える環境とは限らなかった。だからこそ、授業を受けるだけで満足するのではなく、自ら英語を使う場を探し、人に話しかける姿勢が重要であると感じた。また、クラスではチリ出身の学生がケーキを持参し、自然に小さなパーティーが始まるなど、異なる文化を共有し楽しむ雰囲気があった。



動画やスライドを使う双方向な授業展開

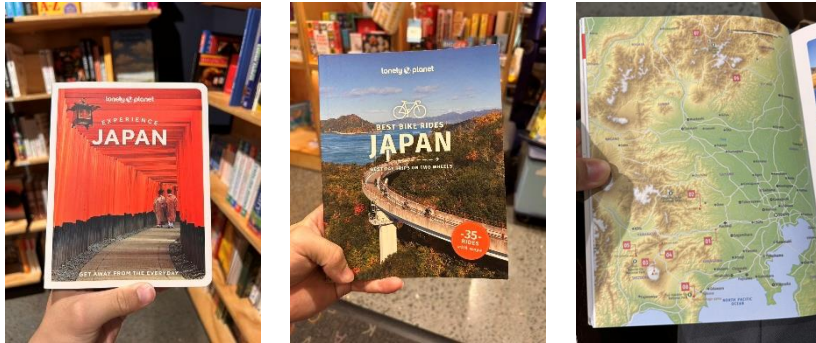
授業中に急に始まるケーキを囲んだパーティー

この経験を通じて、留学の学びは環境そのものではなく、その環境を自分がどのように活用するかによって大きく変わることを実感した。

### 3. 埼玉県の魅力発信

現地での交流や現地の本屋さんにおいてある日本の観光ガイド本の中に埼玉県の観光地の説明がな

かったことなどを踏まえると、埼玉県の知名度は決して高くないと感じた。



様々な日本の観光ガイドがあったものの、埼玉県の名所の記載無し

一方で、Tokyo と言えばみんな知っており、そのため伝え方を工夫すれば興味を持ってもらえる可能性は十分にあると考え、大学の学生や先生方に向けて、合わせて 120 名近い人に埼玉県の PR プレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、主に以下の 3 点を紹介した。

#### ①長瀬や秩父などの自然

東京から近い場所でありながら、川下りや山の景色など、都市部とは異なる自然を楽しむ点を紹介した。特に、東京だけでは感じにくい日本の自然を体験できる場所として伝えた。

#### ②アクセスの良さ

埼玉県は東京都心へ 1 時間で移動できるだけでなく、軽井沢や新潟方面にも新幹線で行きやすい。

さらに東北・北海道方面への移動にも便利であり、日本各地を訪れる拠点として優れている点を強調した。

### ③私の好きな食べ物

観光地だけでなく、自分自身が好きな食べ物として、埼玉ソウルフードであるジャンクガレッジのまぜそばを紹介した。自分の体験を交えて話すことで、埼玉県をより身近に感じてもらえるよう意識した。

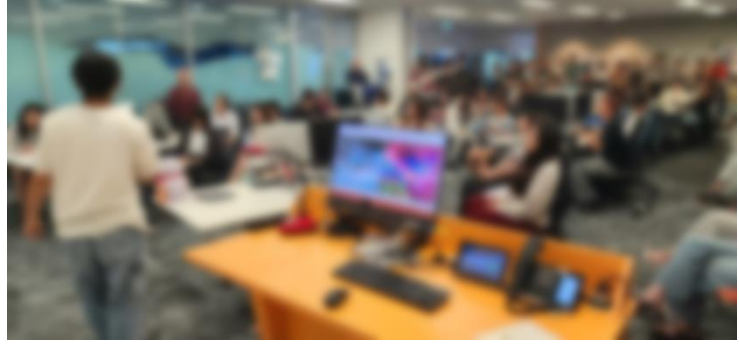


### プレゼンテーションのスライドの一部

この PR 活動で最も難しかったのは、発表内容を準備すること以上に、発表の機会を作ることであった。本プログラムには、もともとプレゼンテーションの場が用意されていたわけではなかった。そのため、私は先生方に相談し、できるだけ日本人以外の学生にも埼玉県を知ってもらえるよう、発表の場を設けていただいた。先生方の協力があったからこそ実現できた活動であり、非常に感謝している。

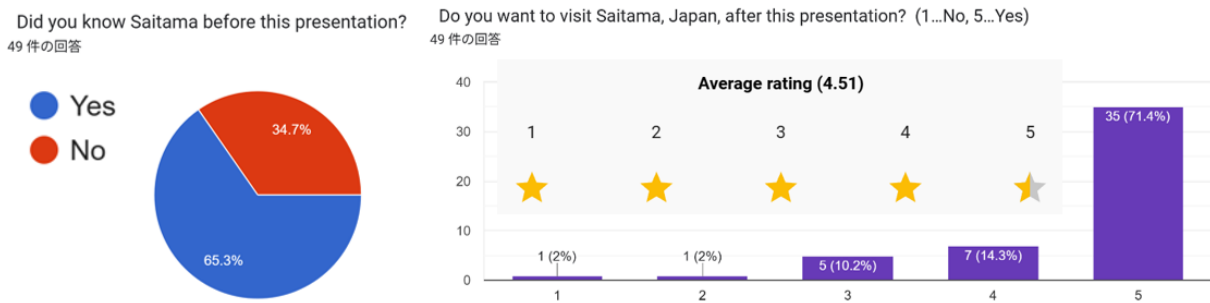


発表の場を用意してくれた先生と固い握手



教室1つ貸し切り！教室の外にもたくさん

発表後にはアンケートを行い、「Do you want to visit Saitama after this presentation?」という質問に対して9か国49人に答えていただき、5点満点中平均4.51点という結果を得た。この結果から、発表を通じて埼玉県への関心を高めることができたと感じている。



アンケート結果

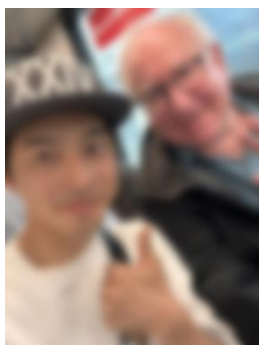
また、日本から埼玉県産のうどんを持っていき、埼玉で親しまれる肉汁うどんを自作して、ホストファミリーに振る舞った。作り方や食べ方を説明しながら一緒に食卓を囲み、料理を通じて埼玉の食文化を身近に感じてもらえた。言葉だけでは伝わりにくい地域の魅力を味覚で共有できた。



日本から持ってきた埼玉産のうどん その他の材料は現地で調達！

このほかにも、学校内やビーチ、街中、バスの中いたるところで、現地の人に自ら声をかけ、延べ100人以上に埼玉県を紹介した。相手の関心に合わせて自然やアクセス、食文化を伝え、埼玉を知らない人にも興味を持ってもらえた。多くの人に「埼玉・日本に行ってみたく思っている」と言ってもらえた。

#### 【特に印象に残っている人】



↑シドニーのバスの中でもイギリスからの観光客に



↑ビーチで釣りをしている現地の人↑釣った魚を見せに来てくれた



↑大学が空港の隣ということもあり、パイロットの人

## 4. 自ら行動して広げた学びとつながり

今回の留学では、授業やホームステイだけでなく、自ら行動することで学びの機会を広げることを意識した。特に印象に残っているのは、授業後の self study、現地でのサークル活動、ボランティア活動、そして高校時代のホストブラザーとの再会である。

まず、授業後の 1:15pm から 2:15pm までの self study の時間を有効に活用した。通常授業が終わると多くの学生は帰宅していたが、先生方がこの時間も学校に残っていることを知り、私は一番お世話になった先生のもとを訪ねた。すると、そこでは6、7人ほどの外国人学生を中心に after class の授業が行われており、IELTS の学習に取り組んでいた。日本人が一人もいない環境に最初は不安

もあり、珍しがられているようにも感じた。しかし、昨年度参加者のレポートにあった「すべての解決策は、話すこと」という言葉を思い出し、彼らの出身地や趣味、現地での出来事について自分から話しかけることを意識した。完璧な英語でなくても、相手を知ろうとする姿勢を示すことで少しずつ会話が生まれ、1週間ほどで自然に話せる関係を築くことができた。

また、現地では OZtag や touch と呼ばれるラグビーに近いスポーツのサークルにも参加した。私は日本でもこの競技を経験したことがあったため、競技そのものには親しみがあった。一方で、参加者の中に日本人はおらず、英語だけでコミュニケーションを取りながら活動する環境であったため、最初は緊張もあった。しかし、スポーツを通じることで、言葉だけに頼らず自然に声をかけ合うことができ、次第に現地の学生とも交流を深めることができた。

さらに、ボランティアクラブにも参加し、新入生向けオリエンテーションの受付を担当した。初めて来た学生を迎える立場を経験したことで、自分自身も多くの人に支えられて現地生活を始められたことに改めて気づいた。



サークル活動



ボランティア活動



加えて、高校時代にクイーンズランド州キングアロイへ交換留学した際のホストブラザーとも再会した。私のオーストラリア留学が決まったことを伝えると、彼も日本を訪れてくれることになり、渡

航前には私の大学や日本を案内した。さらに、オーストラリア滞在中にはブリスベンでも再会し、彼が通うクイーンズランド工科大学を訪問して意見交換を行った。その後、ブリスベンで盛んな船での移動を体験し、高校時代の同級生とも再会し、ナイトマーケットを訪れた。



高校時代の写真



7年ぶりの再会



クイーンズランド工科大学

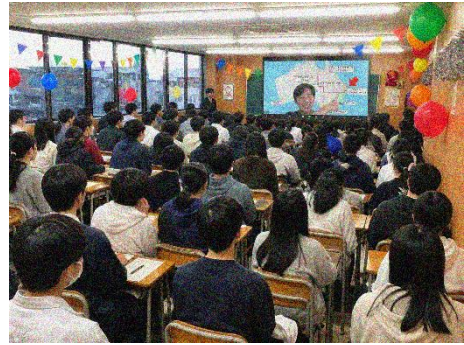


現地の高校時代の同級生

## 5. 今後の展望

今回の留学で得た学びは、今後の大学院での研究活動に活かしたい。国際学会で自身の研究成果を発表する際には、英語を理解する力だけでなく、自分の考えや専門的な内容を相手に伝わる形で発信する力が必要である。今回の留学で、埼玉県の魅力を伝えた経験は、その第一歩になった。

また、埼玉県への還元として、地元の子どもたちが世界に踏み出すきっかけをつくりたい。私はこれまでの経験を活かして、地元で少年野球・中学野球の指導や塾講師をしている。そこで出会う子どもたちに、自分自身が小学生の頃の国際交流をきっかけに海外へ関心を持ち、高校での留学、そして今回の挑戦につなげてきた経験を伝えていきたい。「一歩踏み出せば世界は広がる」という実感を共有することで、次の挑戦を生み出す力になりたい。



オーストラリア滞在中、卒業する地元の中学 3 年生に向けてオンラインで発信

将来は、海外とのつながりを支え、人や地域を結びつける仕事に携わりたい。その中で、私を育ててくれた埼玉県にも貢献していきたい。

## 6. 今後の奨学生に向けて

今後このプログラムに参加する方に伝えたいことは、「オーストラリア・クイーンズランド州で何をしたいのか」という目的意識を持って参加してほしい。大学では 2,3 月は日本人学生が多い時期であり、現地に行けば自然に英語・現地の人と触れ合える環境が得られるとは限らない。だからこそ、埼玉親善大使として誰に何を伝えたいのかを考え、自分から発信の場を作る主体性が重要になると感じた。言語の壁以前に、自ら行動できるかどうか問われる環境であり、そこにこのプログラムならではの面白さがあると思う。

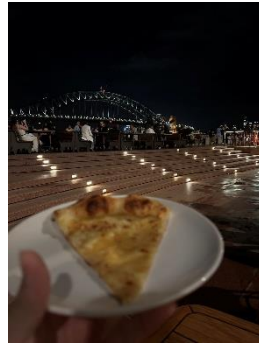
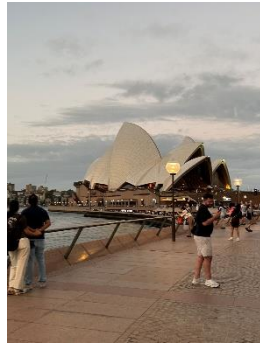
また、この留学の魅力は、比較的自由に行程を組める点である。私は直行便ではなくあえて経由便を選んだ。往路でシンガポールを経由し、復路ではメルボルン、中国・上海を経由し、それぞれの都市にも立ち寄ることができた。さらに、週末には自分の関心に合わせてブリスベンやシドニーなどへ足を運ぶこともできた。

このように、一人で参加するからこそ、自分の目的や興味に合わせて行動を広げられる点は、大学などの団体プログラムとは異なる大きな魅力である。

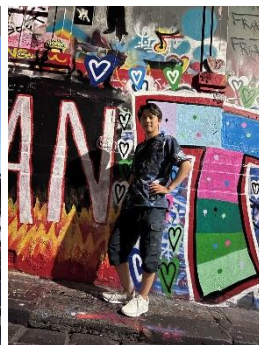
ぜひ今後の奨学生には、語学を学ぶだけでなく、自分なりの目的を持ち、積極的に行動しながら、このプログラムを自分だけの面白い留学にしてほしい。



シンガポール



シドニー



メルボルン



中国・上海

## 7. 最後に

今回の留学は、いろいろな人に会い、いろいろな人に助けられてきたと改めて感じた。自分一人の力だけでは実現できない経験であった。特に、埼玉県の PR プレゼンテーションを行うにあたり、発表の機会をつくってくださった語学学校の先生方には心から感謝している。先生方の協力があったからこそ、現地の学生や先生方に埼玉県の魅力を伝えることができた。

また、留学中に会った友人にも感謝したい。放課後や休日にさまざまな場所へ一緒に出かけてくれたことに加え、街中やビーチでの PR 活動にも同行し、現地の人に声をかける挑戦を支えてくれた。友人たちの存在があったからこそ、積極的に行動し、多くの人とのつながりを築くことができた。



この留学で出会ったかけがえのない友人・先生・ホストファミリー

最後に、このような貴重な機会を与えてくださり、渡航前から帰国後まで支えてくださった埼玉県庁の皆様へ深く感謝申し上げます。今回の経験を一時的なものにせず、今後も埼玉県の魅力を発信し、地元還元できるよう努めていきたい。